

IDEA ジャパン ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、すべての人々の尊厳の確立を目指して

2008年 2月1日発行 5号

創立5周年に向けて

理事長 森元 美代治

2008年は、地球温暖化、異常気象、原油値上がり、円安、株価下落等々、私たちの暮らしをジワジワと締めつけるニュースとともに明けました。会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか？

IDEA ジャパンの会員数は（正会員・賛助会員・寄付して下さった方を含める）240人にもなり、この8月には創立5周年を迎えることとなりました。これまで活動を続けられたのも、ひとえに皆様の温かいご支援の賜物と、心から感謝申し上げます。

ところで、ハンセン病関連のニュースとしては、地域に開かれた療養所にするための将来構想を実現する「ハンセン病基本法」制定に向けて、100万人署名運動が追い込みまじかかっています。いままでIDEA ジャパンとして署名のお願いをしてまいりましたが、まだまだ目標に達していません。どうぞご協力をお願いいたします。

1月11日には全国の療養所で最後に、絶対隔離政策を象徴する「標本とされた胎児」の慰霊祭が星塚敬愛園（鹿児島・鹿屋市）で執り行われましたが、問題はまだ解明されないままです。

5月10・11日には、ハンセン病市民学会総会が東京で開催されますので、IDEA ジャパンとしても、多くの会員が現地実行委員会に入って、積極的に参加・協力しています。開催日が近づくとつれて、ますます多くのボランティアが必要となりますので、どうぞご参加くださいますよう、お願いいたします。

IDEA ジャパン独自の活動としては、1月29日から2月5日に開催される国際ハンセン病学会& IDEA 国際集会に参加するため、理事長はじめ、6人の理事や会員がインドのハイデラバードへ行きます。今回は、＜スティグマ・アイデンティティー・人権＞をテーマとした分科会で、22カ国（アメリカ、パラグアイ、アンゴラ、ブラジル、中国、インド、ウガンダ、ネパール、日本、ケニア、ノルウェイ、エチオピア、コンゴ、ガーナ、ギニアビサウ、インドネシア、韓国、モザンビーク、ナイジェリア、フィリピン、スーダン、台湾）からの参加者とともに議論し、交流を深めます。10年来の旧友との再会や、新しい友人との出会いに期待しております。

このような国際集会に参加したり、訪問したりする中で、快復者の経済的・精神的自立には、まず教育が必要だと考えて、中国、インド、フィリピン、ネパール、タイの快復者子弟への奨学金援助を行ってまいりました。各国から大いに期待されていますので、要請に応じて、今年も引き続き支援いたします。

冒頭にも申し上げましたが、8月の創立5周年に向けて、皆様と一緒に記念すべき事業を企画したいと考えております。どうぞ奮って自由闊達なご意見、アイデアをお寄せください。お待ちしております。

今後とも地道な活動を続けていく所存ですので、ご支援、ご協力下さいますよう、心からお願い申し上げます。

故郷は近かった

理事長 森元 美代治

昨年10月19日から23日まで生まれ故郷の喜界島へ、24日から28日まで奄美市へ、と九つの講演旅行へ行ってきました。幼子が何かを無心にねだるように、長年純粋に追い求めてきた夢の実現でした。これまでの帰郷と明らかに違って、親戚一同が快く受け入れてくれたし、自由にさせてもらえて、感慨もひとしおでした。

母校である喜界町立第二中学校（全生徒数25名）をはじめ、第一中学校（全生徒数188名）、早町中学校（全生徒数61名）、鹿児島県立喜界高校（全生徒数226名）の生徒たちや、喜界町人権同和教育研究会の先生方、町民、村人、親戚、同窓生など多くの皆さんと心おきなく触れ合うことができたのです。

思い起こせば、職場にも慣れて、「これから」という矢先、ハンセン病が再発し、すべてを捨てて多磨全生園に再入所したのが1970年でした。以来、兄弟の他には「美代治は行方不明」とし、両親の死に目にも会えない悲しさ、悔しさもありました。1991年に鹿児島県主催の故郷訪問に参加した折、最後の好機かと嚴重に変装して墓参りし、両親の墓前で惨めな思いに男泣きしたり、生家の門に立ちながら、誰かが居る気配に慌てて逃げ出した空しい思い出もあります。

96年のらい予防法廃止を機に普通にきょうだいで付き合いたいと躍起になっていましたが、前に出れば出るほど叩かれる始末でした。実名で闘病記を出版し、講演、TV出演などがあるた

びに、異常なまでに激しい反発を受けました。

97年には、喜界第二中学校第5期生の同期会に初めて参加し、45年ぶりに旧友たちと再会したり、また名瀬市では市を挙げて私のために文化講演会を計画してくれました。ところが、喜界島の森元家では「とんでもない。絶対に許し難い」と大騒ぎになりました。「森元家の恥。喜界島の恥。奄美大島の恥だ。これから育つ子や孫、甥や姪の結婚に支障を来す」等々、喧々囂々の大騒ぎになりました。八重樫信之理事に先発隊として喜

界島へ行って、兄夫婦と話し合ってもらったところ、幸いにも兄が許してくれたので、奄美市での講演会は大盛況のうちに終わることができました。

けれど、ハンセン病国賠訴訟の原告になったときにはまた反対され、01年、

熊本判決の出る2ヶ月前に兄は、「青酸カリを飲んで死んでくれ」とまで言ってきました。参議院議員選挙に全国比例代表に民主党より立候補し、挨拶回りに帰郷したときも、「何しに来た！ 帰れ！ 帰れ！」と門前払いを喰わされました。

何を言われても、いつかは分かってくれると信じて耐えるしかなかったのです。そんな兄が3年前、高血圧で倒れて急逝しました。私は沖縄に出張中でした。ふた言目には「俺には森元家を守る義務がある」と言ってかたくなに私の活動を拒み続け、ときには私の存在さえ認めようとしなかった兄でしたが、繊細だった兄の心労を思うと、心底憎む気にはなれませんでした。和解の盃を交わし、死に水を取ってあげたいと願っていましたが、ついにその時はきませんでした。

1週間後に喜界島に電話を入れると、「弟とは



喜界島の実家で／07年10月

思わない」と縁切り宣言し、絶縁状態だった大阪の姉が出ました。いつもなら私の声を聞くと、受話器を下ろして、話そうともしない姉が、電話の向こうで泣いていました。私はとっさにその涙の理由を察し、姉に何かの変化を期待しました。

2年前、兄の1周忌に帰郷した直後、大阪で姉や弟たち家族全員と会食をすることができました。奇しくも、兄の死が私たちきょうだいを結びつけ、親戚一同に完全な和解をもたらしてくれたのです。

紆余曲折を経て、長年温めてきたこのたびの故郷での講演紀行となりました。どの学校でも子どもたちは教室の窓から顔を出して「こんにちは。いらっしゃい」と元気な声で歓迎してくれました。講演のあと、しっかりした感想や、謝辞を言い、写真を撮ったり、握手を求める子どもたちも大勢いました。この子どもたちの温もりを大切にしたいと思いました。

忘却の彼方に消えていた、ハンセン病になる前の自分の元気だった子ども時代が浮かんでくる瞬間でもありました。喜界島の美しい自然や文化、隣人を大切に作る人情や環境の中に生まれ育った幸せを噛みしめていました。

何かことある毎に、私をいたわり支援してくれた喜界町役場の吉本実さんとさゆりさんご夫妻、お隣の若い金井勝芳さん、湾小学校の友岡芳俊先生、喜界第二中の佐藤貴紀先生、同級生の前島勇一郎さん、奄美市議会事務局長の松田秀樹さんをはじめとして、故郷の皆様のご尽力によって、今回の故郷での講演紀行が実現できたことに心から感謝せずにはられません。

ハンセン病と教育についての 研究を振り返って

佐久間 建

私が全生園に最も近い小学校でハンセン病の授業（6年生の社会科）に取り組み始めたのは、今から15年前、ちょうどハンセン病資料館が開設した年です。今では東村山市のすべての小中学校でハンセン病・全生園に関する授業が実施されるようになり、子どもたちの学習を通して、保護者や地域の人々にも理解と交流が広がっていることを感じています。

しかし本当に教育の場で「ハンセン病」を取り上げる必要があったのは、らい予防法が存在し、ハンセン病への偏見・差別が日本中に横溢していた時代だったのではないのでしょうか。私たち現在の教師たちは、過去の教師や教育界が犯した過ちを反省も総括もすることなく今日に至っています。政府の施策が180度転換した今日、ハンセン病にかかわる人権教育と啓発が求められるようになりました。しかし、行政の方針転換に従うだけの「上からの人権教育」であるなら、私たちは隔離主義時代の教師と同じ構造の中にあるといえるのではないのでしょうか。

そのような問題意識から、平成17年度より2年間、長期派遣研修として上越教育大学大学院でハンセン病と教育の歴史を研究する機会を得ました。そして、学んだ成果を論文としてまとめることができました。研究テーマは、『近現代日本ハンセン病史における「子ども」と「教師」- “負の経験” をこれからの人権教育に生かすために -』です。ハンセン病療養所内の「子ども」や「教育」については先行研究もあり史料も残されていますが、一般教育とハンセン病の関係やハンセン病隔離政策に果たした「教師」の加害責任については、これまでほとんど論じられてきませんでした。

研究方法としては、文献史料による調査だけでなく、歴史の当事者であった回復者からの聞き取り調査を重視しました。現在、療養所入所者の平均年齢は70代後半になり、かつての「ハンセン病の子ども」や「患者教師」の経験を掘り起こし、後世に伝えることは、今を置いてできません。幸い全国各地の療養所を訪れてご協力を頂くことができ、貴重な証言の聞き取りをすることができました。お話を聞くことができた方は、講演も含めると92名にもなりました。

ここで論文の詳細をお伝えすることはできませんが、研究の成果として次の4点を挙げることができます。

第一の成果は、過去の「ハンセン病の子ども」がどのような状況におかれ、どのような人権侵害が起きていたかを明らかにできたことです。特に、発病直後から療養所収容までに「ハンセン病の子ども」が学校や地域から差別的に排除された経験が、心的外傷として永く生涯に負の影響を及ぼしていることを指摘しました。また、療養所における教育と寮生活の環境の劣悪さ、とりわけ戦時下の「ハンセン病の子ども」は「療養」に値しない過酷な状況に置かれ、命を奪われた事実も数多くあったことを示すことができました。

第二の成果は、隔離政策時代の「教師」が「ハンセン病の子ども」に対して無力であり、加害者でもあった状況を明らかにしたことです。特に、一般校で「らい」の子どもを発見するための身体検査の実態から、学校がハンセン病患者強制収容システムに組み込まれていたことを検証できました。またその背景として、戦前の修身教科書・教師用書における「らい」の記述、戦後の保健体育教科書における「らい」「ハンセン氏病」の記述の誤りの問題も指摘しました。

第三の成果は、ハンセン病史における「子ども」と「教師」の“負の経験”を今日の教育に活かすための視点を明らかにしたことです。その一

つは、「いじめ」という今日的教育課題を考察する視点として、「ハンセン病の子ども」が受けた学校や地域での「いじめ」「差別」の激しさと、それを阻止できず時には加担した「教師」の責任の大きさを示したことです。二つ目は「ハンセン病の子ども」



多磨全生園の桜並木で

のその後の成長に着目し、療養所の青年たちの「生きる力」の獲得について考察したことです。彼らの生きた姿は、「自己実現」「アイデンティティ」「内発性」「生涯教育」といった教育の普遍的問題を考える材料を与えてくれました。

第四の成果は、ハンセン病にかかわる人権教育の現状と問題点を明らかにしたことです。全国の療養所付近の小中学校385校への「交流」「学習」実施状況アンケート調査も実施しました。さらに先進的な教育実践例とそれに取り組む「教師」の姿から学び、ハンセン病にかかわる人権学習の進め方と留意点について具体的な提案を述べました。

学校現場を離れ、重大な研究テーマと格闘した2年間でした。反省と課題は多々ありますが、ハンセン病に対する「学校」「教師」の加害責任を明らかにし、今後の教育実践につなげる研究ができたと自負しています。また、研究成果を教員だけでなく少しでも多くの人々に伝えていく義務を感じています。ハンセン病と教育について関心をおもちの方はぜひご連絡ください。

ソロクトの長老で、早稲田大学での講演会 (IDEA ジャパン & WAVOC 主催) で「韓国のハンセン病問題と日本」について話して下さった金新芽さんが、昨年8月、急逝されました。日本と韓国のボランティア、とくに若者たちの精神的支柱として慕われ、尊敬されていた人だけに、ご逝去が惜しまれています。韓国のテレビ局で、金新芽さんのドキュメンタリー番組が放映されましたので、ご紹介します。

菊池義弘 (翻訳)

SBS 放送 2007.07.20 放映

ドキュメンタリー「愛のハーモニカ」

○海から見る小鹿島の全景

美しい海に囲まれた景色がきれいな島、小鹿島。その小さな島の中にある国立小鹿島病院ではハンセン病患者たちに対する慈善奉仕をする人たちの手が休まることはない。

○小鹿島病院内の病室

ここに特別な夫婦がいるという。

ジュ・ウォルスクさん (慈善奉仕者) 「おばあさんに接する時、とても愛情を込めてされるんです。私も年をとったら、あのような夫婦になりたいと羨ましく思っています。」

○鄭鳳熙さん (金新芽夫人) の病床での金新芽さん

毎日、昼食時に聞こえて来る音。そこでは、あるハラボジ (おじいさん) がハーモニカ演奏をしていた。

○ハーモニカの音 / ♪「われらの願いは統一」

取材者が近づくのもわからないまま、ハーモニカの音に浸っていた老夫婦。どれだけ時間が流れたことでしょう。

妻がベッドからずれ落ちてしまわないようにとベッドの横の木柵を持ち上げてあげた後、安心して自分部屋に帰って行きました。

取材者 「ハラボジは目が不自由なんですか？」

金新芽さん 「はい。よく見えません。」

ハラボジは一級視覚障害者だ。

○病棟から靴を履いて出て行く金新芽さん

一日に一回、妻と会って30分間一緒に過ごすために、病院と部屋を行ったり来たりするというハラボジ。

取材者 「どれくらい、ここにいらっしゃるんですか？」

キム・ジヨン (小鹿島病院 看護師) 「この病棟に来て3年くらいになります。」

取材者 「3年間、毎日来ているんですか？」

キム・ジヨン 「はい。他の病棟にいた時も毎日、来ていたと聞いています。」

○部屋に帰るために廊下を一人で歩いている金新芽さん。言葉が話せない妻の痛みを、ハラボジは他の誰よりも一番良く知っている。

○病棟に向かう廊下

次の日。84歳のハラボジは、いつものように今日も妻に会うために歩いて来た。心の中では一歩でも早く近くに行きたいと思いつつも、しかし……。

○廊下の柱に体をぶつける金新芽さん

妻の下まで行く道は簡単ではない。他の人なら5分で行ける距離だが、30分以上もかかって、ようやく妻に会えた。3年間、毎日、歩いている道。

○病棟で鄭鳳熙さんのベッドの場所がわからず彷徨う金新芽さん

来る道は大変であっても、妻の手を握った時、気持ちがほっとした。

○手を握り合う金新芽さんと鄭鳳熙さん

目が不自由なハラボジが妻にしてあげられることはほとんどない。

○手を握りながら話しかける金新芽さん

○ハーモニカを吹き始める金新芽さん

ハラボジがしてあげられること、ハーモニカ演奏。妻は初めは何もわからない状態だったが、少しずつ夫の心が通じて来た。いつもは顔に表情がない妻が一日に一回だけ笑うのが、夫に会う時間だ。

○別の日、病床での金新芽さん夫婦

病棟に響き渡るハーモニカのメロディー。

○隣のベッドのハルモニハルモニ (おばあさん)

「以前、ハルモニが元気だった時は、ハラボジと一緒に日本にも行ったことがあるんだよ。ハラボジは今でもピアノを弾くのも上手で、音楽は上手だよ。ほんとに毎日、ここに訪ねて来るんだよ。」

○夫婦の若き日の回想シーン

○公園のベンチでハーモニカを吹く金新芽さんに膝枕をしながら寝そべて見上げるまだ20代の鄭鳳熙さん。ハーモニカが繋ぐ夫婦の愛は53年前に始まった。夫が演奏する姿を見て一目ぼれした妻。

○新婚時代の部屋。視力を失った夫の代わりに、妻は夫の目となった。50年を越える歲月、妻の目を通して世の中を見てきたハラボジ。

○病棟から部屋に戻る金新芽さん

いつも目になってくれた妻がいなくなったことは大きい。健康だった妻が倒れて体を痛めたのは自分のせいではないかと思う。何かしてあげられる事はないかと迷ったハラボジ。

○ピアノを弾きながらハーモニカを吹く金新芽さん

二人が知り合った頃、音楽が好きだった事を思い出し、ハーモニカ演奏こそが最善の選択だと、妻への愛情をハーモニカに込めた。金新芽さん「夫婦の愛情とは、生涯、恋愛の感情を抱きながら生きて行くことだと思います。年をとっても、いつも、こうして会うと、初めて会った時のような気持ちがするんです。」

○病棟に向かう廊下を一人歩く金新芽さん
「毎日 暗闇の中を歩いて あなたに会いに行く 今まで一日たりとも欠かしたことはない あなたの輝いた微笑を見たくて 30分の幸せを求めて 今日訪ねて来ます」

○病室での金新芽さん夫婦

妻への愛情をハーモニカに込めて吹くこと

が、妻にとってどれだけ助けになっているだろうか。

○病室から部屋に帰る道の金新芽さん

一時間でも二時間でも、いつまでも一緒にいたいのだが、たとえ短い時間であってもそれには理由があるという。

金新芽さん「私が病棟に行くとき他の人たちが見るのです。病院に一人である方たちは皆、寂しく過ごしているので、それで、私が一日に一回でも訪ねて行くのは、他の人たちに対して、とてもすまない気持ちもあります。」

○病室でハーモニカを吹く金新芽さん

金新芽さん「人は目だけで見ているのではないじゃないですか。心でも見ることはできる。」
「世の光となりなさい」という聖書の言葉から、大きな励ましをいただいたというハラボジ。

○小鹿島の海岸にて 車椅子の鄭鳳熙さんの手を握りながら話かける金新芽さん

金新芽さん「今までいろいろ苦勞をかけてすまないね。いつか天国に行く日まで、この世にあっても、二人で楽しく生きて行こうな。」

いつでも、どこであっても、夫婦が二人で一緒に生きているならば、たとえ遠い道であっても、決して寂しくはない。<END>



ハーモニカを吹く金新芽さん／2006年10月

お礼のこぼし / HANDA (IDEA 中国)

IDEA ジャパンの奨学金は HANDA の奨学金制度に寄付されて ハンセン病快復者の両親を持つ、3省の子どもたちに贈られました。二人の奨学生からお礼のメッセージが届きました。

< IDEA ジャパンのおじさんとおばさんへ >

♣ ファン・シャオリ

皆様にご親切に支援していただいたおかげで、私は成長できました。新学期には中学生になれます。毎日勉強して、進歩しながら、その日が来ることを待ち望んでいました。

父親だけが、私の頼れるたった一人の家族です。でも父は両手足に障害を持っています。ですから、私を育てるのは容易ではありません。私が IDEA ジャパンの奨学金を受けられるようになってから、父の重荷は軽くなりました。私の成績は良くなっていると思います。どうぞ父と私からの感謝の気持ちをお受け取りください。皆様のご健康と、ご活躍と、そしてご幸福をお祈りしています。

♣ メイ・ユシャン

私はギヤンドンという町外れの村の生徒です。皆様からの奨学金で高校1年生を無事に修了することが出来ました。皆様のご支援によって、私は強くなれましたし、自信ができましたし、希望をもつことができました。もし奨学金援助がなかったら、私には勉強するチャンスはなかったでしょう。

皆様のご援助は、私の心をうるおす春の雨のようですし、私の顔に柔らかくそよぐ夏の涼風のようですし、私の体を照らす秋の陽射しのようですし、私の心を温める冬の毛布のようです。私は皆様のご尊い援助を決して忘れません。心か

ら感謝申し上げます。ありがとうございました。

2006年からHANDAの奨学金制度に、IDEA ジャパンから寄付をいただいています。その奨学金によって、14人の生徒が勉強を続けられました。7人は小学生、4人は中学生、3人は高校生です。

奨学金で学校教育を受けられるようになった生徒たちは、彼らの両親のように、差別や中傷を受けても、傷つきやすくはありません。競争に負けないし、社会や家族に貢献できるようになります。たとえば、カングアア病院から来たファン・ゼントンは、HANDAの奨学金によって高校を修了できました。たいへん良い成績で大学に合格し、キャンパスで暮らす準備をしています。

家庭訪問でじかに顔を合わせることで、私たちが地方の状況をよく理解できるだけでなく、外の世界をまったく知らなかった子どもたちに、新しい勉強法や、外の社会の情報をもたらすことができます。彼らは、新しい考え方を探り始めますし、世界は進歩しているということを知るようになります。

学生や生徒、そして快復者の家族に代わって、IDEA ジャパンの援助に心から感謝申し上げます。もしIDEA ジャパンがこれからも、この14人の子どもたちに奨学金援助を続けてくださるなら、たいへんありがたいと思います。

Dr. マイケル・チャン

HANDA リハビリテーション&福祉協会
事務局長

＝お知らせ＝

ドンベク・アガシ（椿娘）／疎外された歴史の地ソロクトで咲いた花

（監督：朴貞淑、韓国、ドキュメンタリー）

韓国ソロクトで暮らしている元ハンセン病患者たちを描いたドキュメンタリー映画『ドンベク・アガシ』が日本で初めて上映されます。IDEA ジャパンも後援していますので、会員の皆様にご紹介します。

4歳の時、ハンセン病患者だった両親と一緒にソロクトに入り、78歳になった今でもそこで暮らしている李幸心さん。彼女の一生を通じて、植民地時代にハンセン病患者たちが耐えねばならなかった苦痛と、解放後の彼らの前に立ちはだかった厳しい現実を描いています。

日時：2008年2月16日（土）午後6時50分～

場所：新宿区角筈区民ホール

http://shinjuku-kuminhall.com/pc/event_tsunohazu.html

入場料：¥500

♣トピックス♣

* 森元美代治理事長が1月12日に古希を迎えました。ロカビリー歌手のミッキー・カーチスと同年です。年々若返ってゆく森元さんのことですから、これからの活躍に期待したいと思います。

* 会員の宇佐美治さんが自伝『野道の草ーハンセン病絶対隔離政策に真向かった70年』を出版しました。「自分のことを話すって、気恥ずかしい。長い間、貝のように口を閉ざしていた」宇佐美さんが、国賠裁判の原告になったのをきっかけに自分自身のことを話し、自伝を著わしました。宇佐美さんは「人生の歴史的到達点として、この本を発刊した」そうです。ぜひご一読を！

みずほ出版 電話：052-825-2011

定価：2000円＋税

♣お願い♣

新しいパンフレットを同封しました。今年度の会費をまだ納入していない方は、パンフレットに付いている振り込み用紙でお振込をお願いします。

発行責任者：森元 美代治

特定非営利活動法人 IDEA ジャパン

<http://www.idea-jp.org/>

事務局：

〒204-0012 東京都清瀬市中清戸4-847

中清戸4丁目アパート7-605

Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記

昨年4月、国立ハンセン病資料館が開設されましたが、批判の声が上がっています。過ちを繰り返さないために、歴史にどう向き合い、どう考えるかが、5月のハンセン病市民学会でも主要なテーマになっています。IDEA ジャパンも協力していますので、ぜひご参加ください。／村上絢子

E-mail info@idea-jp.org

FAX 04-2925-8165